

朝をひらく

ペンを持つが、何も出てこない。頭を揺すってみても出るのはため息。文章がうまくない。自分の思いが相手にしっかりと伝わるような文章を書きたい。

語彙の豊富さは、その人の人生に対する繊細さを物語る。文豪、夏目漱石は、好んで「畢竟」というコトバを使った。

畢竟とは、究極、詰まるところ、本質は、と迫る単語である。このコトバを使うことによって、物事の本質を絞り込み、根本的に何が一番大事なことなのかをズバリと言いつける表現で

言葉のちから

永田 円了
真国寺住職



ある。小説『ころ』の中では「畢竟」が7回登場する。「畢竟このお菓子をくれた二人の男女は、幸福な一对として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった」

「朝をひらく」コラムの執筆も4年目に入り、コトバの世界の難しさを益々かみしめている。毎回、提出前の原稿を家族の面々に一読してもらおう。三番目の姉、長女、長男たちである。

る。興味深いことは、三人三様の批評があるということである。

言葉に厳しくしゃれた俳句も創る姉は、「そしては、しかし、の方がいいがじゃない」と接続詞の使い方を注意してくれる。表面上のコトバより中身を読んでくれよ、と言いたくなるが、謹んで受け入れる。営業の仕事10年目の長女は「お父さん、この文章分っかりにくい！」と、読者の立場に立って、分かりやすさに重点を置く批評をする。人にどう受けるかを考えている。そんなに人の目を気にしなくてもいいじゃないか、と思うがこれもまた大事なこと。

そして、就活を終えこれからの禅の法戦式に臨む長男は「これ、お父さん本当に書きたかったことなげけ？」と、ズバリ私の心中を言い当てる。締め切りに間に合わせるため大急ぎで書いた、内容の乏しい駄文を見抜いた。言葉で表されている内容のエネルギー値を問うたのである。伝えたい気持ちで薄ければコトバでどんなに飾っても、味の薄い作品になってしまう。

そうこうしながらも、締め切りの時間が迫っている。コトバというものは所詮、道具にすぎないものだと知りながらも、コトバのもつ力にしがみつく。

自分の心の中に潜む、まだ形になっていないものを、なんとか引き上げ、人生の舞台に乗せたい。うやむやなものに、輪郭をあたえるものは、畢竟、言葉なのか。

うやむやなものに形